

国会会議の発言中に現れる 意向・意見・見解表明文の変遷

——「と思います」「という{ように／ふうに}思います」の交替——

渡 邊 ゆ か り

1. は じ め に

国会会議の場においては、進行役を務める議長の指名により発言権を与えられた者が、自己の、あるいは所属グループの代表としての意向・意見・見解を提示したり、質疑応答を行ったりすることにより議論が成立する。したがって、このような場においては、発言者の意向・意見・見解を表明する文が数多く用いられる。また、その際「思います」「考えます」といった思考動詞を述語とする文が主節や独立性の高い従属節中で多用される傾向にある。このような思考動詞を述語とする意向・意見・見解表明文のうち「補文＋と思います」と「補文＋という{ように／ふうに}思います」は次の(1)–(3)のように同じ知的意味を有し、補文末に「だろう」「か」「な」といったモダリティ形式を取りうるという共通点を持つ。

- (1) a. もう少し慎重に検討するべきだろうと思います。
b. もう少し慎重に検討するべきだろうという{ように／ふうに}思います。
- (2) a. もう少し慎重に検討するべきではないかと思います。
b. もう少し慎重に検討するべきではないかという{ように／ふうに}思います。
- (3) a. この点についてご説明いただきたいなと思います。
b. この点についてご説明いただきたいなという{ように／ふうに}思います。

本稿では、国会の会議という場においてこれら二つのタイプの意向・意見・見解表明文のうち「補文＋という{ように／ふうに}思います」の使用率が時代の推移とともに上昇傾向にあることを示すとともに、その原因を明ら

かにすることを目的とする。

2. 研 究 方 法

まず、「補文+という{ように／ふうに} 思います」の使用率が時代の推移とともに上昇傾向にあることを示すにあたっては、Web上の国会会議録検索システム^{注1}を用い昭和23年、33年、43年、53年、63年、平成10年、20年の1月1日～2月末日の会議の発話コーパスを作成し^{注2}、コーパス中の「補文+と 思います」と「補文+という{ように／ふうに} 思います」の使用率を比較した。

次に、「補文+という{ように／ふうに} 思います」の使用率が時代の推移とともに上昇した原因については、「という{ように／ふうに} 思います」の選択に補文末のモダリティが関与しているという推定のもと、各年代別に補文末のモダリティ形式と「と 思います」「という{ように／ふうに} 思います」各々との共起率を調査した。

最後に、この調査の結果をもとに「補文+と 思います」と「補文+という{ように／ふうに} 思います」のうち後者の使用率が時代の推移とともに上昇した原因を考察した。

3. 調 査 結 果

3.1. 「と 思います」と「という{ように／ふうに} 思います」の使用率の推移

次の表1は、昭和23年、33年、43年、53年、63年、平成10年、20年のコーパス中に現れた「補文+と 思います」「補文+というように 思います」「補文+というふうに 思います」の使用数を示している。

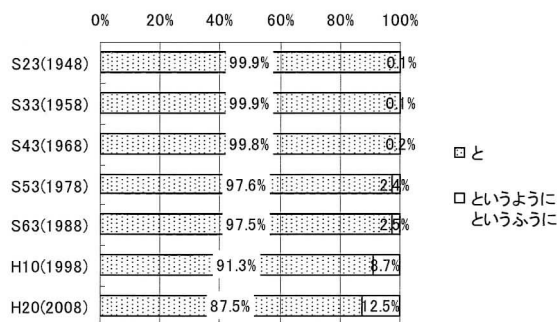
表1 「と 思います」「というように 思います」「というふうに 思います」の使用数

検索対象期間	と	というように	というふうに	合計
S23(1948)年1月1日～2月末日	3,518	1	1	3,520
S33(1958)年1月1日～2月末日	12,063	4	12	12,079
S43(1968)年1月1日～2月末日	2,080	0	4	2,084
S53(1978)年1月1日～2月末日	8,167	29	174	8,370
S63(1988)年1月1日～2月末日	3,257	11	73	3,341
H10(1998)年1月1日～2月末日	6,685	31	607	7,323
H20(2008)年1月1日～2月末日	11,226	120	1,488	12,834

また、次のグラフ1は、「補文+と 思います」と「補文+という{ように／

ふうに} 思います」の使用合計を 100%とした場合の各々の使用率を示している。

グラフ1 「と思います」と「という{ように／ふうに} 思います」の使用率



グラフ1からは、「補文+という{ように／ふうに} 思います」の使用率が昭和53年頃より少しずつ上昇していることがわかる^{注3}。

次の3.2では、この現象に補文末モダリティが関与しているという推定のもと行った、補文末モダリティと「と思います」「という{ように／ふうに} 思います」各々との共起関係についての調査結果を示す。

3.2. 補文末モダリティと「と」「という{ように／ふうに}」との共起関係

補文末モダリティと「と思います」「という{ように／ふうに} 思います」各々との共起関係を調べるに際しては、まず、平成21年の1月1日～2月末日のコーパスを作成し、この中に現れる1件目～100件目の「補文+という{ように／ふうに} 思います」について、どのような補文末形式が何回現れたのかを調べた。次頁の表2は、本調査において使用数の高かった補文末形式上位5位までと、それぞれの使用数、使用率を示している。

次に、このデータをもとに、上位4位までの補文末形式「動詞の連用形+たい」「{名詞／形容動詞の語幹} + {である／だ}」「{名詞／形容動詞の語幹} + {であろう／だろう}」「{名詞／形容動詞の語幹} + {ではないか／じゃないか}」のそれぞれについて、「と思います」「という{ように／ふうに} 思います」との共起率が昭和53年以降どのように推移していったかを調べた。調査に用いたコーパスは、3.1で取り上げた調査と同様の方法で作成した昭和53年、58年、63年、平成5年、10年、15年、20年の1月1日～

2 月末日のコーパスである。

表2 「という{ように／ふうに}|」と結合する補文末形式上位5位(平成21年コーパス)

順位	補文末形式	使用数	使用率
1	動詞の連用形+たい	28	28.0%
2	名詞／形容動詞の語幹 + {である／だ }	20	20.0%
3	名詞／形容動詞の語幹 + {であろう／だろう }	12	12.0%
4	名詞／形容動詞の語幹 + {ではないか／じゃないか }	9	9.0%
5	名詞／形容動詞の語幹 + {ではないかな／じゃないかな }	3	3.0%
5	ありがたい	3	3.0%
5	サ変動詞の語幹+できる	3	3.0%
5	ある	3	3.0%

まず、以下の表3は、各年代における「動詞の連用形+たい」と「と思います」「という{ように／ふうに}| 思います」各々との共起数、ならびに共起率を示している。

表3 「たい」と「と思います」「という{ように／ふうに}| 思います」との共起数と共起率

検索対象期間	と	という{ように／ふうに}	合計
S53(1978)1月1日ー2月末日	3,683(98.4%)	60(1.6%)	3,743(100%)
S58(1983)1月1日ー2月末日	1,602(98.0%)	33(2.0%)	1,635(100%)
S63(1988)1月1日ー2月末日	1,302(99.5%)	7(0.5%)	1,309(100%)
H05(1993)1月1日ー2月末日	3,790(96.5%)	138(3.5%)	3,928(100%)
H10(1998)1月1日ー2月末日	2,610(93.8%)	174(6.3%)	2,784(100%)
H15(2003)1月1日ー2月末日	3,620(92.4%)	296(7.6%)	3,916(100%)
H20(2008)1月1日ー2月末日	4,725(91.0%)	466(9.0%)	5,191(100%)

なお、表3の数値は、「たいと思います」「たいというように思います」「たいういうふうに思います」を検索語に指定して得た数値から「がたいと思います」「がたいというように思います」「がたいというふうに思います」を検索語に指定して得た数値を引いたものに相当する。このような方法を採用したのは、接辞「がたい」を含む「ありがたい」を補文末に取るものが表2の5位に登場しており、3%の使用率であったからである^{注4}。

表3からは、「動詞の連用形+たい」と「という{ように／ふうに}| 思います」との共起率が時代の推移とともに少しずつ上昇していることがわかる。昭和53年から平成20年までの上昇幅は、7.4ポイントである。

次に、以下の表4は、各年代における「{名詞／形容動詞の語幹} + {である／だ}」と「と思います」「という{ように／ふうに} 思います」各々との共起数、ならびに共起率を示している。

表4 「である／だ」と「と思います」「という{ように／ふうに} 思います」との共起数と共起率

検索対象期間	と	という{ように／ふうに}	合計
S53(1978)1月1日－2月末日	1,044(97.3%)	29(2.7%)	1,073(100%)
S58(1983)1月1日－2月末日	546(97.3%)	15(2.7%)	561(100%)
S63(1988)1月1日－2月末日	509(98.3%)	9(1.7%)	518(100%)
H05(1993)1月1日－2月末日	1,200(92.3%)	100(7.7%)	1,300(100%)
H10(1998)1月1日－2月末日	1,096(92.6%)	88(7.4%)	1,184(100%)
H15(2003)1月1日－2月末日	1,626(90.6%)	168(9.4%)	1,794(100%)
H20(2008)1月1日－2月末日	1,865(89.3%)	224(10.7%)	2,089(100%)

表4からも「{名詞／形容動詞の語幹} + {である／だ}」と「という{ように／ふうに} 思います」との共起率が時代の推移とともに少しずつ上昇していることがわかる。昭和53年から平成20年までの上昇幅は、8ポイントである。

次に、以下の表5は、各年代における「{名詞／形容動詞の語幹} + {であろう／だろう}」と「と思います」「という{ように／ふうに} 思います」各々との共起数、ならびに共起率を示している。

表5 「であろう／だろう」と「と思います」「という{ように／ふうに} 思います」の共起数と共起率

検索対象期間	と	という{ように／ふうに}	合計
S53(1978)1月1日－2月末日	422(99.1%)	4(0.9%)	426(100%)
S58(1983)1月1日－2月末日	235(96.7%)	8(3.3%)	243(100%)
S63(1988)1月1日－2月末日	175(96.2%)	7(3.8%)	182(100%)
H05(1993)1月1日－2月末日	444(88.8%)	56(11.2%)	500(100%)
H10(1998)1月1日－2月末日	310(87.3%)	45(12.7%)	355(100%)
H15(2003)1月1日－2月末日	521(80.4%)	127(19.6%)	648(100%)
H20(2008)1月1日－2月末日	506(72.7%)	190(27.3%)	696(100%)

表5からも、「{名詞／形容動詞の語幹} + {であろう／だろう}」と「という{ように／ふうに} 思います」の共起率が時代の推移とともに上昇していることがわかる。昭和53年から平成20年までの上昇幅は、26.4ポイント

である。

最後に、以下の表6は、各年代における「{名詞／形容動詞の語幹} + {ではないか／じゃないか}」と「と思います」「という{ように／ふうに}思います」各々との共起数、ならびに共起率を示している。

表6 「ではないか／じゃないか」と「と思います」「という{ように／ふうに}思います」との共起数と共起率

検索対象期間	と	という{ように／ふうに}	合計
S53(1978)1月1日－2月末日	328(89.1%)	40(10.9%)	368(100%)
S58(1983)1月1日－2月末日	171(87.7%)	24(12.3%)	195(100%)
S63(1988)1月1日－2月末日	148(87.6%)	21(12.4%)	169(100%)
H05(1993)1月1日－2月末日	378(79.1%)	100(20.9%)	478(100%)
H10(1998)1月1日－2月末日	273(72.6%)	103(27.4%)	376(100%)
H15(2003)1月1日－2月末日	359(66.2%)	183(33.8%)	542(100%)
H20(2008)1月1日－2月末日	322(67.2%)	157(32.8%)	479(100%)

表6からも「{名詞／形容動詞の語幹} + {ではないか／じゃないか}」と「という{ように／ふうに}思います」との共起率が時代の推移とともに上昇していることがわかる。昭和53年から平成20年までの上昇幅は、21.9ポイントである。

表3-表6を比較することにより、各補文末形式と「と思います」「という{ように／ふうに}思います」との共起関係について、以下に示す共通点ならびに相違点を取り出すことができる。

〈共通点〉

- 1) いずれの補文末形式も、各年代を通じて「と思います」との共起率の方が高い。
- 2) いずれの補文末形式も、年代の推移とともに「という{ように／ふうに}思います」との共起率が上昇している。

〈相違点〉

- 1) 昭和53年においては、「ではないか／じゃないか」と「という{ように／ふうに}思います」との共起率は10.9%であるが、同年における他形式と「という{ように／ふうに}思います」との共起率は3%に満たない。
- 2) 昭和58年以降は、各年代の「という{ように／ふうに}思います」との

共起率は、「ではないか／じゃないか」が最も高く、「であろう／だろう」が次に高く、残りの2種類については、大差がない。

- 3) 4種類の補文末形式のうち、「たい」「である／だ」の2種類は、「であろう／だろう」「ではないか／じゃないか」の2種類に比べ、昭和53年から平成20年にかけての「という{ように／ふうに}思います」との共起率の上昇幅が小さい。

これらの点からは、「という{ように／ふうに}思います」の選択に「ではないか／じゃないか」の持つモダリティが大きく関与していることが示唆される。この「ではないか／じゃないか」のモダリティには様々なものが存在するが、本調査で用いたコーパス中の「と思います」「という{ように／ふうに}思います」の補文末形式として現れたものは、「推量+自問」のモダリティに限られていた^{注5}。従って、推量あるいは自問のモダリティが「という{ように／ふうに}思います」の選択と関わっている可能性がある。

しかしながらこれらのうち推量のモダリティについては、昭和53年の時点で同じ推量の働きを有する「であろう／だろう」と「という{ように／ふうに}思います」との共起率が0.9%とかなり低く、またこれらの共起率が10%を上回るのが15年後の平成5年であることから、もともとは「という{ように／ふうに}思います」の選択に大きく関与していたわけではないと考えられる。

残る可能性は自問のモダリティである。補文末に現れた自問のモダリティ形式には、「かな」という形式も存在した^{注6}。この「かな」と「と思います」「という{ように／ふうに}思います」各々との共起数と共起率について調べたところ以下の表7の通りであった。

表7 「かな」と「と思います」「という{ように／ふうに}思います」との共起数と共起率

検索対象期間	と	という{ように／ふうに}	合計
S53(1978)1月1日－12月末日	11(78.6%)	3(21.4%)	14(100%)
S58(1983)1月1日－12月末日	21(77.8%)	6(22.2%)	27(100%)
S63(1988)1月1日－3月末日	20(80.0%)	5(20.0%)	25(100%)
H05(1993)1月1日－2月末日	12(75.0%)	4(25.0%)	16(100%)
H10(1998)1月1日－2月末日	18(72.0%)	7(28.0%)	25(100%)
H15(2003)1月1日－2月末日	29(63.0%)	17(37.0%)	46(100%)
H20(2008)1月1日－2月末日	28(41.2%)	40(58.8%)	68(100%)

なお、自問のモダリティのみの影響を見るため、推量のモダリティと自問のモダリティの組み合わせだった「ではないかな／ではないのかな／じゃないかな／じゃないのかな／ではなからうかな／じゃなからうかな／であろうかな／だろうかな」は表7の数値には含まれていない。また、昭和53年～昭和63年の1月1日～2月末日の「かな」の使用合計数は、いずれも10以下であったので、昭和53年、58年については、検索対象期間を1月1日～12月末日に、昭和63年については、検索対象期間を1月1日～3月末日に指定して検索を行った。

表7に見るように「かな」と「という{ように／ふうに} 思います」との共起率は各年代を通じて20.0%～58.8%の間に収まっている。このような高い共起率は、自問のモダリティが「という{ように／ふうに} 思います」の選択に大きく関与していることを裏付けている。

また、「かな」は「か」と「な」の合成により生じた形式であり、後者の「な」も単独で実感のモダリティを持つものとして補文末に現れることから、「な」と「と思います」「という{ように／ふうに} 思います」との共起数と共起率についても調べたところ、結果は以下の表8の通りであった^{注7}。

表8 「{たい／である／だ／であろう／だろう} な」と「と思います」「という{ように／ふうに} 思います」との共起数と共起率

検索対象期間	と	という{ように／ふうに}	合計
S53(1978)1月1日—12月末日	21(84.0%)	4(16.0%)	25(100%)
S58(1983)1月1日—12月末日	11(68.8%)	5(31.3%)	16(100%)
S63(1988)1月1日—3月末日	18(72.0%)	7(28.0%)	25(100%)
H05(1993)1月1日—2月末日	12(60.0%)	8(40.0%)	20(100%)
H10(1998)1月1日—2月末日	8(61.5%)	5(38.5%)	13(100%)
H15(2003)1月1日—2月末日	22(52.4%)	20(47.6%)	42(100%)
H20(2008)1月1日—2月末日	40(48.2%)	43(51.8%)	83(100%)

なお、この調査では、自問のモダリティを持つ「ではないかな／じゃないかな」を排除して調べるため、補文末の「な」は「たい／である／だ／であろう／だろう」に「な」が付加されたものに限定した。また、先と同様、昭和53年～昭和63年の1月1日～2月末日の「な」の使用合計数は、いずれも10以下であったので、昭和53年、58年については、検索対象期間を1月1日～12月末日に、昭和63年については、検索対象期間を1月1日～3月

末日に指定して検索を行った。

表8に見るように「{たい／である／だ／であろう／だろう}な」と「という{ように／ふうに}思います」との共起率は各年代を通して16.0%～51.8%の間に収まっており、自問の「かな」と同様、共起率の高さを確認することができる。

従って、以上の調査結果より、自問と実感のモダリティの共通点が「という{ように／ふうに}思います」の選択に大きく関わっていると見ることができる。しからば、「たい」が表す願望、「である／だ」が表す断定、「であろう／だろう」が表す推量には見られない、両者の共通点は何であろうか。

「かな」が表す自問、「な」が表す実感の二つのモダリティには、話者自身に対する話者の心的働きかけを表しているという共通点が存在する。具体的に示すと、自問は話者に対する話者の問いかけを、実感話者は話者の行った認識に対する話者の再認識、再確認を表している。ゆえに、「という{ように／ふうに}思います」は、話者の話者自身に対する心的働きかけに呼応して選択されるようになったと見ることができる。

4. 「という{ように／ふうに}思います」の使用率が上昇した原因

先に、「という{ように／ふうに}思います」は、話者の話者自身に対する心的働きかけに呼応して選択されるようになったという見解を示した。しかしながら、補文末に話者の話者自身に対する心的働きかけを表すモダリティ形式が存在する場合に「という{ように／ふうに}思います」が必ず選択されるというわけではない。この理由を考えるに際しては、本稿で扱う意向・意見・見解表明文の意味構造を把握しておく必要がある。

本稿で扱う意向・意見・見解表明文は、話者の意向・意見・見解を表す補文と、思考動詞「思います」を構成要素としている。このうち、補文は話者が実行中の言語的思考活動をほぼ即時的に音声的な知覚表象として具現化したものに相当する。ゆえに、補文は、「話者の思考活動の結果生じた静的な思考内容」であると同時に「発話時における話者の動的な思考活動そのもの」として捉えることもできる。

「という{ように／ふうに}思います」の選択に大きく関与する、話者の話者自身に対する心的働きかけという補文末モダリティは、同一話者間で行われるインタラクティブな心的活動の一部を形成している。ゆえに、自者の認識に対する自問や実感といったインタラクティブな心的活動は、願望、断定、

推量といった非インタラクティブな心的活動より動的であり、その分、前段落に挙げた補文が持つ二つの側面のうち後者の「発話時における話者の動的な思考活動そのもの」という側面を前景化しやすい。

従って、「というように／ふうに」思います」は、補文が持つ二つの側面のうち「発話時における話者の動的な思考活動そのもの」という側面が前景化された場合に選択されるのではないかと考えられる。

次に、昭和 53 年以降、「というように／ふうに」思います」が、インタラクティブな心的活動のみならず、非インタラクティブな心的活動との呼応も強めていった理由について考える。

まず、推量の「であろう／だろう」との共起率については、昭和 63 年から平成 20 年にかけて 23.5 ポイントと大きく上昇している。これは「というように／ふうに」思います」が、「推量＋自問」のモダリティを表す「ではないか／じゃないか」と呼応するうちに、類推により推量の「であろう／だろう」との呼応も強めていったものと考えられる。

次に、願望の「たい」や断定の「である／だ」との共起率についても、昭和 53 年以降、上昇幅は推量の「だろう」に比して小さいものの上昇している。これは、「というように／ふうに」思います」が、自者の動的な思考活動そのものを、思考者としての自者から心的距離を置き、提示者として提示する、という表現価値を有しており、この表現スタイルが時代の推移とともに国会会議の場において好まれるようになったからではないかと考えられる。

この見解の妥当性は、次に述べる二つの言語事実からも確認することができる。

一つ目は、「というように／ふうに」思います」の使用は、国会会議の場における意向・意見・見解表明文としては問題ないが、次のようなテレビのクイズ番組においてゲスト回答者が司会を務める出題者に対して、正答が何番であると思うかを回答する場面においてはやや不自然であるという事実である。

- (4) (場面：テレビのクイズ番組で司会を務める出題者がゲスト回答者に回答を求めている場面)

司会を務める出題者：「正解は何番でしょう。」

ゲスト回答者：？「三番だというように／ふうに」思います。」

国会会議の場では、議長の名により発言権を与えられた者は、自者ならびに自者の所属するグループの考えを、討論の相手だけではなく会議の参加者全員に広く関心を持ってもらえるように提示する必要がある。思考者としての話者の存在と提示者としての話者の存在を二分し、自己の思考活動というパフォーマンスを前景化する「という|ように／ふうに| 思います」型の発話スタイルは、この目的を果たすための一つの戦略として浸透してきたのではないかと考えられる。

一方、(4) のようなクイズ番組の回答場面においては、回答者は出題者の質問に答える必要はあるが、自らの考えをその場にいる他のゲスト回答者や観客全員に関心を持ってもらえるように提示する必要は存在しない。従って、(4) では、自者の動的な思考活動そのものを、思考者としての自者から心的距離を置き、提示者として提示するという言語行為が場にそぐわないため、「という|ように／ふうに| 思います」が不自然となる。

二つ目の言語事実は、「という|ように／ふうに| 思います」を用いた意向・意見・見解表明文においては、「と」の前後あるいは「と」の代わりに音声的なポーズが置かれやすいことである。平成 21 年のコーパス中に現れる「と 思います」「という|ように／ふうに| 思います」各々の最初の 50 件を衆議院インターネット審議中継 (<http://www.shugiintv.go.jp/jp/index.php?ex=HT>) と参議院インターネット審議中継 (<http://www.webtv.sangiin.go.jp/webtv/index.php>) からマイクロテレコに録音し、録音データを Wave Surfer という音声分析ソフトで解析したところ引用の「と」の前後、あるいは「と」の代わりに 0.1 秒以上の音声的ポーズが置かれた件数は、「と 思います」が 4 件、「という|ように／ふうに| 思います」が 28 件であった。次の表 9 と表 10 は、この 4 件と 28 件の補文末形式とポーズの位置ならびにポーズの長さを示している。また、一番左の列の番号は、当該の発話文が今回使用したコーパス中の何件目に現れたものであるかを示している。さらに、補文末形式の後の●、▲、■は、ポーズの置かれた位置を示しており、●は「と」の直前、▲は「と」と直後、■は「と」が省略された場合の「と」の代わりとなる位置に相当する。

表9 「と思います」の「と」周辺に現れる音声的ポーズ（第171期国会）

No.	会議名	発言者名	補文末形式と0.1秒以上のポーズ
10	衆－本会議－2号	二階俊博	たい▲ (0.108秒)
18	参－本会議－2号	鳩山邦夫	だろう▲ (0.406秒)
26	衆－国土交通委員会－1号	奥野信亮	ではないか▲ (0.181秒)
31	衆－国土交通委員会－1号	奥野信亮	ではないかな● (0.162秒)

表10 「という{ように／思います}」の「と」周辺に現れる音声的ポーズ
（第171期国会）

No.	会議名	発言者名	補文末形式と0.1秒以上のポーズ
2	衆－財務金融委員会－1号	越智隆雄	だ▲ (0.331秒)
4	衆－財務金融委員会－1号	越智隆雄	たい● (0.221秒)
6	衆－財務金融委員会－1号	越智隆雄	だ▲ (0.260秒)
10	衆－財務金融委員会－1号	中川昭一	である● (0.613秒)
12	衆－財務金融委員会－1号	鈴木克昌	たい● (0.850秒)
14	衆－財務金融委員会－1号	鈴木克昌	よし▲ (0.118秒)
16	衆－財務金融委員会－1号	内藤純一	たい▲ (0.131秒)
17	衆－国土交通委員会－2号	三日月大造	たい▲ (0.219秒)
18	衆－国土交通委員会－2号	川内博史	たい● (0.220秒)
19	衆－国土交通委員会－2号	川内博史	たい▲ (0.210秒)
20	衆－国土交通委員会－2号	川内博史	ではないか▲ (0.250秒)
22	衆－国土交通委員会－2号	川内博史	たい▲ (0.253秒)
23	衆－国土交通委員会－2号	川内博史	たい▲ (0.268秒)
24	衆－国土交通委員会－2号	川内博史	たい■ (0.279秒)
25	衆－財務金融委員会－2号	中川正春	たい■ (0.172秒)
26	衆－財務金融委員会－2号	中川正春	たい■ (0.324秒)
27	衆－財務金融委員会－2号	中川昭一	だろう▲ (0.167秒)
28	衆－財務金融委員会－2号	佐々木憲昭	だ● (0.510秒)
29	衆－財務金融委員会－2号	中川昭一	だろう▲ (0.438秒)
32	衆－総務委員会－1号	鳩山邦夫	ではないかな▲ (0.341秒)
36	衆－予算委員会－5号	川内博史	たい● (0.178秒)
39	衆－予算委員会－5号	宮崎礼壹	である▲ (0.125秒)
40	参－予算委員会－2号	北川イッセイ	だ▲ (0.510秒)
41	参－予算委員会－2号	北川イッセイ	たい● (0.122秒)
42	参－予算委員会－2号	北川イッセイ	たい■ (0.350秒)
44	参－予算委員会－2号	尾立源幸	である▲ (0.456秒)
45	参－予算委員会－2号	白川方明	ておる▲ (0.301秒)
48	参－予算委員会－4号	宮川努	だ▲ (0.280秒)

表9、表10からは、「という{ように／ふうに} 思います」を用いた意向・意見・見解表明文の方が、「と思います」を用いた意向・意見・見解表明文よりも、「と」の前後あるいは「と」の代わりに音声的なポーズが置かれやすい

ことがわかる。「という{ように／ふうに}思います」を用いた意向・意見・見解表明文に現れるこのような音声的ポーズは、思考者としての自者と提示者としての自者の間に置かれた心的距離を表していると考えられる。一方、「といます」を用いた意向・意見・見解表明文に音声的ポーズがほとんど現れないのは、補文が動的な思考活動の結果生じた静的な思考内容として捉えられており、話者は、自らの思考内容の提示者としての役割しか持たず、役割の異なる二つの自者の心的距離を音声的ポーズで表現する必要がないためであると考えられる。

5. お わ り に

本稿では、国会会議の場で用いられる「補文+といます」と「補文+という{ように／ふうに}思います」について、両形式の使用数の合計を100%とした場合、後者の使用率が時代の推移とともに上昇していることを示し、その理由について調査に基づく考察を行った。調査の結果、「補文+という{ように／ふうに}思います」の選択が自問や実感といった話者自身への心的働きかけを表すモダリティと関わっていることが明らかとなった。また、「という{ように／ふうに}思います」の使用率が補文末モダリティの種類の如何に関わらず上昇してきたのは、話者の動的な思考活動そのものを、思考者としての自者から心的距離を置き提示者として提示するという表現スタイルが国会会議という場において好まれるようになったからであるという結論に達した。

なお、現時点において、「補文+といます」「補文+という{ように／ふうに}思います」は、知的意味は同一であるが、その表現価値は全く同一ではない。「補文+という{ように／ふうに}思います」には、「補文+といます」にない付加価値が存在するため、(4)のような場面制約が存在する。今後この付加価値がさらに変容するのか、あるいは漂白され(4)のような場面における使用も自然となり「補文+という{ように／ふうに}思います」が「補文+といます」と完全に交替してしまうのか、あるいは、「補文+という{ように／ふうに}思います」が「補文+といます」との勢力争いに破れ消え去っていくのかは不明である。今後の動向にも注目したい。

注

注1 国会会議録検索システムの URL は、<http://kokkai.ndl.go.jp/>

注2 検索に際しては、開催日付を昭和23年、33年、43年、53年、63年、平成10年、20年の1月1日～2月末日に指定した。また、検索語については「思います」を「すべて含む」に指定した。こうして検索された発話を会議の種類ごとにテキスト形式でダウンロードした後、それぞれのテキストデータを年代ごとにワード形式で一括し、これをコーパスとして使用した。

注3 青山(1989)によれば、1972年に参議院記録部に設置された整文委員会で、以下の四つの整文規準が提案されたということである。

1. 言い誤り、脱落、不整などのため発言の趣旨を明確に文字に表現したいと判断される場合は、軽微なものに限り、社会通念上認められる表記の方法に従って当該部分の整理を行う。
2. 字句の整理は、一步誤ると改竄につながることを常に念頭に置き、必要最小限度において慎重に行い、軽微かどうか判断したい場合は発言者等に確認した上で行う。
3. 発言そのものが問題となるおそれがあると判断される場合は、字句の整理を行わない。
4. 会議録主任が発言の訂正の請求を受けた場合は、その訂正が軽微なものである時は会議録主任において処理し、訂正の内容が問題になるおそれがあると認められる時は、必要に応じ委員長の許可を求めるものとする。

しかし、松田ほか(2008)では、上記に該当しない丁寧語、冗漫な表現が修正されている事例も報告されている。従って、「というように／ふうに」思います」が冗漫な表現として「といます」に修正された事例が皆無であるとはいえない。しかしながら、グラフ1を見る限り、「というように／ふうに」思います」の使用率は先の四つの規準が提案された1972年を挟み10年ごとに徐々に上昇していることから、このような修正は発見されたとしても明確なルールの基に行われたとはみなしがたく、偶然生じた可能性が高い。よって、このような修正事例による数値の誤差は極めて小さいと考えられる。

注4 このような例を引いてもなお補文末に「いたい」「かたい」のような形容詞を取るものが残る可能性もあるが、平成21年のコーパスを対象に行った調査の1件目から100件目の例の中にはこのような例は存在しなかった。ゆえに、このような例が含まれる確率は極めて低く、表3の値に大きな影響はないと考えられる。

注5 田野村(p.122)は、否定疑問文「ではないか」を形式的側面、機能的側面から次の三つに下位分類している。

第一類 発見した事態を驚き等の感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するように相手に求めたりするもの。

例 よう、山田じゃないか。

第二類 推定を表現する。話者は前の表現の内容を否定してはおらず、寧ろ、それを認める方に傾いている。

例 (不審な様子から) どうもあの男犯人じゃないか？

第三類 否定辞本来の性格を発揮する。

例 (1は素数ではないことを教えられて) そうか、1は素数じゃないか。

「と思います」「という|ように／ふうに|思います」の補文末に現れる「ではないか／じゃないか」のモダリティは、これらのうちの第二類に相当する。田野村は、第二類について、「推定を表現する (p.17)」とした上で、以下のように述べている。

ただ、「らしい」「だろう」等に比べ、非断定的である。即ち、話者は推定内容を結論とすることに躊躇を覚えている。これは、疑問文の形式を取っていることとも無縁ではないであろう。疑問の姿勢が専ら自分に向けられれば自問となり、相手に(も)向けられれば、判断の提起や同意の要請となる。(田野村：p.21)

注6 表2では、「かな」を含む「|ではないかな／じゃないかな|」が5位に登場している。

注7 篠田(2006)は「な」の働きについて次のように述べている。

(前略)「な」は意識的モニター機能を示すが、必ずしも何かを確かめているわけではなく、その発話によって表現される認識を自覚しながら述べたという標識である。つまり、自分がある認識をもっていることを意識しながら発話するとき、あるいは、ある認識をもった自分を意識しながら発話するとき、「な」が使えるのである。(p.7)

本稿では、補文末に現れる「な」のモダリティを実感と呼んだが、これは篠田の言う意識的モニター機能とはほぼ一致する。ただし、本稿では、意識的モニター機能を、話者の行った認識の同時再認として捉えている。

参 考 文 献

- 青山學司 (1989) 「会議録作成に携わって一字句の整理を中心に一」『立法と調査』152
安達太郎 (1992) 「『傾き』を持つ疑問文—情報要求文から情報提供文へ—」『日本語教

- 安達太郎 (1997) 「『だろう』の伝達的な側面」『日本語教育』95
- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 小野正樹 (2001) 「『ト思う』述語文のコミュニケーション機能について」『日本語教育』110
- カノックワン・ラオハブラナキット (1996) 「『カナ』『カシラ』に関する考察」筑波大学国語国文学会編『日本語と日本文学』23
- 黒滝真理子 (2005) 『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性—モダリティの日英語対照研究』くろしお出版
- 篠田裕 (2006) 「終助詞『な』と『ね』の認識的意味」徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会編『徳島文理大学比較文化研究所年報』22
- 篠田裕 (2007) 「終助詞『な』の意味再考—話し手の『いま・ここ』における主観的判断の標識として—」徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会編『徳島文理大学比較文化研究所年報』23
- 徐愛紅 (1999) 「文末思考動詞『思う』の再考」広島大学教育学部編『広島大学教育学部紀要 第二部』48
- 杉本和之 (1996) 「『思う』の統語論的、語集的特徴」中京大学国文学会編『中京国文学』15
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』152
- 鄭相哲 (1994) 「所謂確認要求のジャンナイカとダロウ—情報伝達・機能的な観点から—」大阪大学大学院文学研究科日本語学講座編『現代日本語研究』1
- 仁田義雄 (1991) 「第四章 疑問表現の諸相」『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄 (1994) 「〈疑い〉を表す形式の問いかけの使用—『カナ』を中心とした覚書—」大阪大学大学院文学研究科日本語学講座編『現代日本語研究』1
- 松田謙次郎ほか (2008) 「第2章 国会会議録はどれほど発言に忠実か?—整文の実態を探る—」『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房
- 三宅知宏 (2000) 「疑念表明の表現について—カナ・カシラを中心に—」鶴見大学編『鶴見大学紀要 第一部 国語・国文学編』37
- 三宅知宏 (1994) 「否定疑問文による確認要求的表現について」大阪大学大学院文学研究科日本語学講座編『現代日本語研究』1
- 宮崎和人 (2001) 「動詞『思う』のモーダルな用法について」大阪大学大学院文学研究科日本語学講座編『現代日本語研究』8

- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』 ひつじ書房
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞『思う』をめぐって一文の意味としての主観性・客観性—」 『日本語学』 11 (9)
- 湯本久美子 (2004) 「第三章 “One of my hypothetical worlds” 表示マーカー『と思う』」 『日英語認知モダリティ論—連続性の視座』 くろしお出版
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yokomizo, S. (1998) “Believing, Wanting, and Feeling: Three Representational Modes of Embedded Propositional Contents” 『世界の日本語教育』 8

付 記

本稿は、日本語学会 2010 年春季大会（於・日本女子大学）における口頭発表の内容を修正・加筆したものである。席上、多くの方から示唆に富んだご意見・ご教示を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。